

恋の演義

坂西眞弓

蝸牛の胎には女が宿っている

糠雨の茵で

妖しい濃気に擁かれる 紫陽花

その重たげな葉叢の奥に

伝説の古城が変幻している

若者は華奢な指で

水晶のように透明な殻を摘みあげる

渦巻の行手は

恋する死女の柩であろうか

若者の反り返った真紅の唇から

微苦笑が洩れると

幽厲の織りなす緞帳によって

なま

一層の闇に封じられる

欣席 あるいは眷族の恋

不吉な光の綾の中に

青銅のロンボスがぐるぐる廻っている

誰に調律されたのであろうか

一对の自働人形が

ラビの庭で恋を語らっている

灌水農業（アグリカルチャー）の大きいなる成果で

甘美な液体を充たした覇王樹の

妖異なる花は

日時計（クロノメーター）の運行に逼迫するであろうか

王家の数奇な物語を綴った野外劇は

数十億年の生涯を遂げた沙塵とともに

星空の彼方に溶け入り

若い主人公たちは

永遠の彫鏤に化している